

2014年春
第22号

区政レポート



最新情報はWEBで <http://shiraishi-keiko.net> @shiraishikeiko



練馬区の財政 現状とこれからを質す

練馬区議会議員

白石けい子



保育&介護のプロフェッショナル

民主党・無所属クラブ会派幹事長 現在2期目
高松に保育所とデイサービスの融合施設「NPO法人ケアステーションぽかぽか」を設立。保育と介護のプロフェッショナルの立場から、みなさまの声を区政へ届けます。

略歴・・・ 練馬区貫井育ち、高松在住。昭和29年生。練馬二小・貫井中・都立第四商卒。保育士・社会福祉主事。

所属委員会・・・ 企画総務常任委員会、医療・高齢者等特別委員会、議会運営委員会、財産価格・土地評価審議会、光が丘清掃工場運営委員、ねりま介護保険問題研究会員、ねりま介護事業者協同組合準備委員

家族・・・ 夫・子ども7人（義理含む）、孫2人、犬1匹、猫2匹

中面特集

「女性の社会進出は何故進まないの？」

練馬区の有識者を集めてパネルディスカッションを開催。

女性の社会進出には何が必要なのか――。



〔平成26年度予算審議を終えて〕

今定例会中に志村区長が逝去され、平成26年度予算は志村区長が手掛ける最後の予算になりました。改めてこれまでの区政に対するご尽力に敬意を表します。

平成26年度一般会計予算額は、納税者数と税制改正による税の増額を見込んだ72億8000万円増となる2391億3100万円と過去最高規模となつていきます。ところが、柔軟性が必要な収支比率が、健全数値の70〜80%から89.8%と悪化し、特に、その一因となつている

社会保障関係経費（扶助費・保健福祉費・子ども家庭費等）は、今後も増え続けることが予想されています。また、平成27年度から平成36年度まで

の10年間に要する施設の改修・改築費用は2100億円に達すると試算され、予算を許さない区財政の圧迫が考えられます。

区は、予算編成にあたり、常に「選択と集中」を方針として掲げてきましたが、今後もその視点は重要と考えます。

わが国はすでに人口減少時代に突入しています。練馬区における人口のピークはまだ先と考えられています。先と遠くない将来、かつて経験したことがない、縮小型の予算編成を強いられることが予想され、場合によっては区民に痛みを伴う事業の縮小を迫られるかもしれません。

今後は、区民の理解と協力を得ながら、持続可能な財政運営のために、事業の優先順位を明確にし、受益者負担の原則に基づいた施策を行っていく必要があると提言し、今回の平成26年度一般会計予算ならびに各会計予算に賛成をいたしました。

(白石) 日本のワーク・ライフ・バランスは遅れている。育児休業の取得率はまだ世界最低クラスだ。2007年に「ワーク・ライフ・バランス憲章(内閣府)」や「仕事と生活の調和推進のための行動指針(内閣府)」を定めるなど行政の動きは進むが、実態は異なる。なぜ隔たりが生じるのか？

統計資料からも日本が立ち遅れている状況がわかる。未婚率は高くなり、第一子出産年齢も高くなってきている。「育児休業」など制度として確立されているものでも、その活用は進んでいない。

介護も同じ傾向にある。介護休業制度の利用率はわずか0.14%にとどまる。こうした現状をどう考えるか？

(江端) 法律などの制度と実際の生活の間にはズレがある。社会は変化し続け、人々の価値観は多様化しているからだ。女性の価値観も変わった。結婚だけが人生ではないという声も聞こえる。

介護について言えば、制度自体に問題がある。介護休業

男女の意識の違い

(白石) 子育てが一息ついたら、社会と関わっていきたくと考える女性は増えている。どう考えるか？

(加藤) 私はシングルマザーとして、4人の子どもを育てている。家の外で働き、家族のなかでは夫の役割も担っている。男性の気持ちもわかるつもりだ。だが、ところどころで「女性だから」「お母さんだから」と言われるケースにぶつかる。

(江端) 「男は外、女は内」という時代は終わった。高度経済成長期には、このスタイルが効率的だったが、今は違う。稼いで成長すれば良いという観念に対する疑問を抱く人は多い。

女性の社会進出についても、その理由が様々だ。女性が稼がないと生活できないから働くのか、それとも社会に参加したいのか、理由によって共働きの中身は大きく異なる。

イベントレポート

女性の社会進出は、何故進まないの？

2014年3月8日 10:00～11:30 サンライフ練馬

多くの女性が社会参加する世の中になってきたが、社会進出している女性は、今も厳しい現実と向き合っているのが実情だ。今回は女性の社会進出をテーマに、子どもがすこやかに育つための原点はなにか——ということに立ち返りたい。

子育てを支援する仕組みや選択肢は少ない。少子高齢化が急速に進むなか、社会として、あるいは地域コミュニティで対応を考えていかなければいけない時期に来ている。

練馬区の各分野の有識者を集め、パネルディスカッションを開催した。



岩城 明

練馬区保育園父母連合会会長。子育てや家事に積極的に参加する「イクメン」という言葉ができる以前から、育児に積極的に関わっている。



江端 貴子

前衆議院議員。「女性のための政治スクール」副校長。経営コンサルティング会社や製薬会社などに勤めながら子育てをし、また、両親の介護を経験。



白石 けい子

練馬区議会議員2期目。保育と介護の融合施設「ケアステーションぼかぼか」を設立し、現在は練馬区議として、介護、保育現場の改善に向けて活動している。



加藤 かり

ケアーズ大泉学園訪問看護ステーション事務長。就職、結婚、主婦、出産を経験し、今はシングルマザーとして4人の子どもと暮らしている。



佐藤 礼子

「ねりま若者サポートステーション」で、自立や社会参加のきっかけを模索する若者に対する相談員をしている。

(敬称略)

制度で認められる休業日数は93日間。育児ならば小学校にあがるまでなど、タイミミングを想定しやすいが、介護の場合は、いつ休業すればよいのか、あらかじめわかる人はいない。この不合理さは私が政治を志したきっかけにもなった。

ワーク・ライフ・バランスを考えると、様々な個人的状況に、職場や自治体などこまめに向き合えるのが鍵になる。

(岩城) 国は完璧なつもりで制度を作っている。だが、育児や介護の制度を使って休暇を取るための人員が現場に不足している。実際に、そうした場面も見越して余裕のある人員を抱える企業は少ないだろう。景気とも関係するが、企業には余裕のある人員確保が求められているのだと思う。

(加藤) 訪問介護で働くスタッフは、家族がインフルエンザになると、介護現場での感染を防ぐために働けなくなってしまう。

これからの社会に望むこと

(白石) 今の時代、答えはひとつではない。その人その人が自分らしく生きたいと考えている。反面、年間の自殺者はおおよそ3万人を数える。生きづらさを感じる人は決して少なくない。女性が社会進出しやすい、これからの社会を作るにはどうしたらよいか。

(江端) 様々なことが両極端に語られる風潮がある。だが、本当の「解」は端ではなく、真ん中にあるはずだ。多様な価値観を受け入れられる社会を作ることが大切だ。そうしたことを一人ひとりが考える時期にきているのだろう。

(岩城) 就業時間をきっちり守る米国のような生活が理想だ。日本もそうした社会を目指してもらいたい。

(加藤) 一人ひとりの声が大きな声につながる。自分のま

しまう。できるだけスタッフ間でフォローしていこうと考えているが、人員など現実的に限界はある。

(佐藤) 学校を卒業して就職。数年たって結婚して子どもが生まれる。年齢とともに給与が増え、定年を迎える。こうした生き方のモデルが崩れた最初の世代が、今の若者の世代だろう。

私が勤務する「ねりま若者サポートステーション」には、そうした若者からの声が届く。相談者は7対3の割合で男性が多い。ある調査によると、男性は結婚後、妻に専業主婦となることを期待していることが多いという。その比率は専業主婦になりたいたいと考えている女性の実に2倍だ。

こうした男女での意識の差が、様々な場面で男女間の協力を妨げているのではないか。

わりから声をあげていかなければならない。地域から声をあげていきたい。

(佐藤) 練馬には、何か良いことをしたいと考える人達がたくさんいる。でも実際には、どう動いたらいいのかわからなかったり、きっかけがない人も多い。一人ひとりのそういう思いをつなげていくことで、身近な社会としての地域づくりが進んでいくのだと考えている。

(白石) 統計上は、女性の社会進出は進んでいる。それでも、「さほどの実感はない」と多くの人は感じているようだ。今後の宿題とさせていきたい。

子育てしやすく、介護もしやすい、また、早く帰宅して有意義な人生を味わえるような社会づくりを皆さんと考えていきたい。

「女性の社会進出」

私見・直言

女性の社会進出の話になると、「女性ばかり？」と違和感を持つ人もいますが、今回のセミナーの目的は、「男性が女性の進出を阻んでいる」が論点ではありません。男性も女性も人生の中で、結婚・出産・育児・家族の介護と向き合う時、仕事との両立を誰かが悩むわけです。その解決策は？ 社会の現状やあり方・考え方を今回はパネリストの人たちと考えてみることでできました。

江端氏の「第一が自分、第二が家庭、第三が仕事」、岩城氏の「お父さん頑張っているね」と褒めてもらえるという励みになる」のメッセージも大変印象的でした。

これからは、子ども・男性・中高年・高齢者等の視点からも見つめたワーク・ライフ・バランスのあり方などを多くの人たちと共に考えていきたいと思えます。

今回の開催の際はぜひご参加ください。

区長に訊く

財政・生活等の直面課題に斬り込む

財政運営について

4月から法人住民税が一部国税化がされる一方、消費税の地方分が現行の1%から1.7%となり、区の財政への影響は少ないとの見方もあります。しかし、地方消費増税分の約17%は、総務省の助言により、「社会保障施策に充てること」とされており、自治体での自由度が低くなります。

今後、増え続ける経費に対応していくためには、好調な経済が続いていかない限りマインスマの方が大きくなるとの見方があります。



一般質問の様子は区役所のテレビでも同時中継されました

また、事務事業と補助金の見直しには、既得権となつていく分野を含め、「聖域」を設けず積極的に行うべきと考えます。

食物アレルギー対策について

昨年の厚生労働省の調べによると、食物アレルギーでアナフィラキシーショックを起こした児童・生徒は4万9855人で、9年前の2.7倍に急増。アナフィラキシー対策は重要です。

学校在籍期間中の経過観察の体制や教職員や学校給食調理員らへの現場不安を払拭するための十分な体制が区の責務として求められています。

様々なアレルギーに対する育児への不安に対して多種多様な相談と情報があります。が、今後は医師会との連携で、正しい機関の受診につながるようすることが重要と考えます。

五十代からの「老い支度」について

誰もが、五十代は働き盛りで、まだまだ子育て中の人もいれば、親の介護が始まる人もいるなど、「老い」に正面から対峙するのはまだ先だと考えがちかもしれませんが。しかし、自分は若いつもりでも、健康面や生活面などに大きな変化を迎える節目の年代でもあります。少しでも若いうちから、自身の将来設計を考え、充実した老後の過ごし方への意識・準備ができる「老い支度」は五十代がちょうど良いのではないのでしょうか。

足立区では高齢者対策の一環として、五十代から老い支度を考える「老い支度読本」の改訂版が1万5000冊発行されました。練馬区も今後の高齢人口増を考えた場合、五十代からの老後の準備や意識啓発をしていく視点は重要ではないかと考えます。



足立区のホームページからPDF版が見れます

編集後記

2月より開催されていた第一回定例会や3月8日のセミナーも盛会のうちに終了しました。

今定例会中に志村豊志郎区長が逝去され、会期延長もありました。新区長選挙及び区議補選の投票日が4月20日と決定。これからの練馬区の行方が決まる大事な節目となります。しかし、23区内の自治体の状況を見ても、区議選と同時選挙ではない区長選挙の場合、投票率は20〜30%台という低いデータがあります。「関心がないから……」と関心の低さが気になります。

今後の練馬区の行方は首長によって左右されることは間違いありません。有権者の声が反映される選挙とするためにも、ぜひ投票に足を運んでいただきたいと思えます。